

## Locus of Controlが精神的健康に与える影響について —自己肯定感と病理的特徴に基づく自己愛との視点から—

田中道弘  
(埼玉学園大学)

### 要旨

Locus of Control と精神的健康とは密接に関わっているように思われる。本研究ではさらに Locus of Control が精神的健康に与える影響について“自己肯定感”と“病理的特徴に基づく自己愛”との視点から分析することにした。Locus of Control 得点による内的統制の高い者は、低い者ものより自己肯定感得点が有意に高く、病理的自己愛得点が有意に低いことが確認された。上記の結果より、Locus of Control が抑うつ以外にも、精神的健康に影響を与えている可能性があることが示された。

### 問題

Rotter (1966) は、自身の提唱した社会的学習理論から「期待-価値理論」を提唱している。期待は学習課題の成功確率といったものであり、価値はある課題に対して成功した際に手に入れられると予測されるものである。Rotter によれば、価値には個人差があり、また状況に応じた期待を重視している。特に、重要な期待として統制の位置 (Locus of Control) という概念を提唱している。統制の位置には外的統制 (External Locus of Control) と内的統制 (Internal External Locus of Control) の2側面ある。外的統制傾向が強いものは、自分の行動結果は、自分ではコントロールができない運や機会によって決まると考え、内的統制傾向の強いものは、自分の行動結果を、基本的に自分の努力や能力によってコントロールすることが可能であると考え。次良丸 (1986) は、内的統制型の人は、心が常に安定しており、他者に対して優越感と自信があり、欲求不満状況に耐える力があり、他人に好感を与え自尊心も高いことから社会的な適応力がある。その一方で、外的統制型の人は、不合理な価値観、気分障害、不適応指標が高いことなどを指摘している。

Rosenberg (1979) も、統制の位置の問題に着目しており、内的統制は高自尊心と関連し、外的統制は低自尊心と関連していることを指摘している。わが国においても、Locus of Control 尺度 (この尺度得点が高ければ、内的統制が高い) と抑うつ尺度との間には-.414の負の相関が確認されており (鎌原・樋口・清水, 1982)、統制の位置と精神的健康とは密接に関わっているように思われる。

ところで、わが国の精神的健康に関する研究を概観すると、しばしば文化的な背景による問題が指摘されている。例えば、欧米の社会背景から作り上げられてきたという背景をもつ自尊心には、自己の尊厳や、自身を尊敬 (respect) することが前提として概念に含まれている。多くの日本人にとっては、自身を尊敬 (respect) するということは、違和感を覚えることが多い (田中, 2002, 2008, 2011a)。そこで、田中 (2005, 2008) は、自己の尊厳や尊敬なしに、単純に自身を好ましく肯定的に捉えるために、自己肯定感を重視している。榎本 (2010) は、自己肯定感とは、自己評価の一種であるとし、自己肯定感の形成要因として4つの要因を指摘している。すなわち、①他者から与えられた評価や評価的態度、②他者との比較、③実際の成功・失敗体験、④理想とする自己像との比較、であると捉えている。このような前提のもと、田中 (2008) は、自己肯定感は「自己に対して前向きで、好ましく思うような態度や感情」と定義している。自己肯定感の高さは、統制の位置 (内的統制の高さ) とも深くかかわり、精神的健康と深く結びついている可能性がある。しかし、このような視点による研究

は、筆者の知る限り、なされていない。

次に、外的統制型の者は、先にも述べた次良丸(1986)の説明にもあったように、不合理な価値観、気分障害、不適応指標が高いことから、過度な自己愛傾向との関係とも密接な関係があることが推測される。このような視点での自己愛については、岡田(1999)が、病理的特徴に基づく自己愛と解釈し、これを測定する尺度を開発している。

以上のことから、本研究では、統制の位置が精神的健康に与える影響について、自己肯定感と病理的特徴に基づく自己愛との視点から分析することを目的とする。

## 方法

調査協力者は、茨城県と埼玉県の国立大学、及び私立大学の大学生160名のうち、男性は128名、女性は32名であった。年齢は、18歳から23歳で、平均年齢は、男性は20.2歳、女性は20.3歳であった。実施時期は2004年10月中旬から2005年1月下旬であった。使用した尺度と項目は、(成人用一般的) Locus of Control 尺度(鎌原・樋口・清水, 1982)は18項目で、4段階評定(そう思う～そう思わない)であった。自己肯定感尺度 ver. 2(田中, 2005, 2008)は8項目で構成され、4段階評定(よくあてはまる～まったくあてはまらない)であった。病理的特徴に基づく自己愛に関する尺度(岡田, 1999)は18項目で構成され、(以下、病理的自己愛)、6段階評定(全くあてはまらない～とてもあてはまる)であった。

## 結果

(成人用一般的) Locus of Control 尺度の平均得点と信頼性を求めたところ、46.8点(SD=7.87)であり、尺度の信頼性は $\alpha = .802$ であった。自己肯定感尺度 ver. 2では、平均得点は、22.6点(SD=4.31)であり、尺度の信頼性は $\alpha = .800$ であった。病理的特徴に基づく自己愛に関する尺度の平均得点は、59.4点(SD=9.99)であり、尺度の信頼性は、 $\alpha = .724$ であった。Locus of Control 尺度と自己肯定感尺度 ver. 2は、信頼性が高いことが確認されたが、病理的特徴に基づく自己愛に関する尺度は、やや信頼性が低い結果となった。

次に、各尺度の相関を求めた(table 1)。

table 1 使用した尺度の相関係数

	LOC	自己肯定感	病理的自己愛
LOC	-	.363	-.246
自己肯定感	.363	-	-.232
病理的自己愛	-.246	-.232	-

※LOCはLocus of Control 尺度のことである。

次に、Locus of Control 尺度の得点を第1四分位と第3四分位により3群に分割した。その結果、低群(21~41点:34名)、中群(42~52点:92名)、高群(53~69点:34名)となった。Locus of Control 尺度得点から分割された3群と、自己肯定感尺度 ver. 2得点、および病理的特徴に基づく自己愛尺度の得点について一元配置の分散分析を行った(table 2)。

Locus of Control 得点の各群(低群、中群、高群)を独立変数とした一元配置の分散分析の結果、自己肯定感得点の平均得点の間には有意であることが示された。そこで多重比較(Tukey)を試みたところ、Locus of Control 得点の低群、中群、高群の各平均得点の間に有意差が見られた(MSe=17.1,  $p < .05$ )。Locus of Control 得点の各群(低群、中群、高群)での病理的自己愛得点の平

均得点の間には、有意であることが示された。多重比較を試みたところ、Locus of Control 得点の低群と高群との平均得点の間に有意差が見られた (MSe=97.4,  $p < .05$ )。

table 2 Locus of Control 尺度得点の3群別の平均値と標準偏差

内容	低群 (L) n=34	中群 (M) n=92	高群 (H) n=34	多重比較 (Tukey)	F(2, 159)
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)		
自己肯定感 得点	20.26 (4.86)	22.92 (3.77)	24.09 (4.28)	L<M, H	7.93
病的自己 愛得点	62.59 (10.57)	59.21 (9.99)	56.79 (8.75)	L>H	2.98

## 考察

本研究の結果より、Locus of Control 得点による内的統制の高い者は、低い者ものより自己肯定感得点が有意に高いことが示された。このことは、Rotter (1966) や Rosenberg (1979) の自尊心を前提とした研究結果とも一致する。自己肯定感という基準においても、同様の結果が示されたことは、統制の位置による認知の仕方が、文化を超え、精神的健康に影響を及ぼしていることが考えられる。同時に、この結果は、自己肯定感の低い者に対しては、外的統制から内的統制へ自己の捉えかたを修正することで、精神的健康度を高くできる可能性を示しているものと考えられる。

次に、Locus of Control 得点による内的統制の高い者は、病的自己愛得点が有意に低く、外的統制の高い者は、病的自己愛得点が有意に高いことが確認された。Locus of Control については、外的統制の高い者に対しては、不合理な価値観、気分障害、不適応指標が高いこと (次良丸, 1986) や、抑うつ度の高さ (鎌原・樋口・清水, 1982) が先行研究より指摘されている。このような不適応との関係性が、自己愛についても確認できたことも、自己肯定感と同様に、統制の位置による問題が精神的健康の問題に密接に関わっていることが示唆されているものと言えよう。

本研究の結果より、Locus of Control と精神的健康とは密接な関わりがあることが示されたことから、精神的不適応者に対して内的統制の認知的な位置づけを、外的統制から内的統制へ修正することで、精神的健康状態の回復や改善に寄与する可能性が確認できたとも考えることができた。

田中 (2011b) は、自分が変わることに対する肯定的な捉え方の背景に、自己肯定感とともに、向上心という視点を重視している。今後は、このような問題とも結びつけながら、精神的健康の研究を進めていくことが求められる。

## 文献

- 榎本博明 (2010). 子どもの「自己肯定感」のもつ意味——自己肯定感の基盤の揺らぎを乗り越えるために—— 児童心理, **910**, 1-10.
- 次良丸睦子 (1986). 内的統制型と外的統制型 詫摩武俊・鈴木乙史・清水弘司・松井豊 (編) シリーズ・人間と性格 第5巻 性格研究の拡がり ブレーン出版, pp. 215-226.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 (1982). Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, **30**, 302-307.
- 岡田努 (1999). 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究, **9**, 21-31.
- Rosenberg, M. (1979). *Conceiving the self*. New York: Cambridge University Press.
- Rotter, L. B. (1966). *Generalized expectancies for internal versus external control of*

reinforcement.

Psychological Monographs, **80**, 1-28.

田中道弘(2002). 文化と自己 梶田叡一(編) 自己意識研究の現在 ナカニシヤ出版 pp.171-188.

田中道弘(2005). 自己肯定感尺度の作成と項目の検討 人間科学論究, **13**, 15-27.

田中道弘(2008). 自尊感情における社会性, 自尊感情形成に際しての基準: 自己肯定感尺度の新たな可能性 下斗米淳(編) シリーズ自己心理学第6巻:社会心理学へのアプローチ 金子書房 pp.27-45.

田中道弘(2011a). 自己肯定感 榎本博明(編). 自己心理学の最先端: 自己の構造と機能を科学する あいり出版, pp.129-140.

田中道弘(2011b). 自分が変わることに対する肯定的な捉え方の背景にあるものは何か?—自己肯定感, 向上心, 時間的展望, 特性的自己効力感の視点から マイクロカウンセリング研究, **6**, 12-23.

<注>本研究は, 日本教育心理学会総会第50回大会(2008)において発表した。

「Locus of Control が精神的健康に与える影響について (1) —自己肯定感と病理的特徴に基づく自己愛との視点から—」 p.538 に加筆修正を加えたものである。

受付 2014 年 11 月 7 日

受理 2014 年 12 月 10 日